棋士の情景

～勝負の厳かさは、どんな時代も変わらない～

棋士・九段　島　朗

（第２話）

自信こそ重要

昨年は将棋連盟100周年の記念の年で、その年に関西将棋会館、東京の日本将棋連盟と同時に新会館建設、オープンの運びとなりました。現在の建設費高騰の中で、こうした大事業が進められたのは、偏にファンの皆様、将棋を応援してくれる方々のお力添えの賜物という他ありません。棋士・関係者一同感謝ばかりです。棋士の対局は関西が昨年12月より、東京は年明けからスタートしております。新たな会館で、現代・次代の棋士たちが名勝負を積み重ねることが、皆様に報恩できる一番のことかと思います。

藤井聡太さんの出現がそのまま将棋ブームを巻き起こし、将棋界の大恩人であることは明らかですが、新会館建設を考え進めてきた、羽生善治現会長、佐藤康光前会長、また実行委員の谷川浩司十七世名人、森内俊之九段など、棋界を代表する稀代の名棋士たちの思いを結集させたことも、これまた大きな推進力であることは間違いありません。

羽生さん、佐藤さん、森内さんと一緒に若い頃、共に研究を重ねたことを、「島研」として今でも取り上げられることは私も面映ゆい限りで懐かしい思い出ですが、彼らが棋士になりたての四・五段時代よりその強さと将来性、また人間性のすばらしさなどに感銘を自分は強く受けていました。日ごろから「羽生さん、佐藤さん、森内さんは近い将来間違いなく棋界を制覇するだろうし、いまA級で戦っても負け越すことはないでしょう」と本音をごく自然に話していました。

そうした言葉はいつしか公然と先輩棋士にも伝わり、面白いはずがありません。しかも当時A級に到達していない自分が言うのも、身の程知らずという気もします。

そんな時、自分に以前から目をかけて頂いていた関西の元A級の先輩から「本音なのはわかるけど、曖昧にしたほうがいいこともあるんだ。たぶん現実は君の言うことがきわめて近いと思うけど、上の世代の棋士が一番気にするのは、若い彼らに自信を持たせるということなんだ。みな自分の地位を維持するために、自信とプライドを必死に保って戦っている。ほかの棋士に対し、いかに自信に揺らぎを与え、失わせるかが、長期的な勝負をする上で一番重要なのだから。ましてやこれから伸びてくる新芽に、その自信を与えることは、脅威以外の何ものでもないんじゃないかな…」と柔らかくたしなめられ、各々の棋士が長くこの世界で生き延びる根っこのようなものを、その方から教えられた思いがしました。

将棋の世界のみならず、一回の勝敗ですべてを得ること、また失うことは仕事の上であまりないと思います。日常は一発勝負ではなく、日々の努力の連続であるならば、棋士の一つ一つの勝負も、その自信の奪い合いなのかも知れません。

若い頃の未熟の発言ではあったけれど、もし彼らにより自信を与えるきっかけの一つだったのなら、それもまたよかったのかなと、いま振り返りそう感じます。